

言葉

プレ・トラウマティック・オーダー

大学時代に所属していた部活の学生達から相談があると声をかけられた。部を離れて10年ほどが経過する。私は平素大学との接点がない。学生達は大学にいる年配のOBに相談していた。学年的にもっと自分達に近くて話しやすいOBはいないか。かくして、私が名指された。大会に出るためにOBから寄付を得たいがそれをいかんせん。私は彼らのために酒の場をもうけた。現役の主将と、次期主将と、引退した学生OBがやってきた。私は事前に、OBを動かすための文章を準備するようお願いしていた。大会に出たいが、コロナ禍で収入が減ったという。コロナ禍以前は、OBが集う機会があり、当然それは集金の機会でもあった。加えて、このコロナ禍のため、大会中の宿泊先が限定されることとなった。これまでのように安宿を自分達で探すことができない。つまり、コロナ禍で収入は減ったが支出は増えるという。従って、OBの寄付金もこれまで以上に必要となる。文章には、そのあたりの経緯が書かれていた。しかし、そこにはある別の意図について

もたっぷりと文量が割かれていた。曰く、「大会へ参加するための費用を自らの足で集めるとするのは道理かもしれませんが、ご寄付集めを含め、部に関する様々な部員の負担を積みに積み重ねた結果、部員の減少・部の衰退に繋がっていると考えます。そのような負担を少しでも減らしたい」直接挨拶に訪れて集金するという慣習は部の衰退の原因であるらしい。これはいらぬ。コロナ禍で収入は減ったが支出は増えた。それは事実だ。しかし、部の衰退については、解釈でしかない。その解釈に納得しないOBからは金を引き出せない。なにせ、会いに行くのは面倒だから挨拶に行かないが金はくれ、というわけなのだから、それなりの反発は予想されそう。あろうことか、現役の主将と学生OBが泣き出した。「これをわかってくれないOB達って一体なんなんですか、もう絶望します」と。この数年、部員数が著しく減っており、あたかも衰退の一途をたどるようだった。彼らは諸々の重圧に耐えながら、やめていく部員を尻目にみながら、細々と部を維持していた。私はそのことを多とした。しかし、寄付金をいつもより集めるには

目的の腑分けをしなければならない。
主に学生 OB が中心となり「もうそのよ
うなトラウマの被害者を作りたくない。
そのためにはどう改革ができるか。向こ
う 10 年間後輩がトラウマを」と論陣を張
った。大会は 2 ヶ月後に迫っているとい
うに、10 年間のトラウマ防止計画を「今
こそ大改革を」と銘打って意気揚々とな
っていた。
一方で私は、繰り返し、目的を明確にし
た方がよいと説いた。
OB の行動をどう変えたいのか、
トラウマをわかってもらいたいのか
お金をもらいたいのか
両者を同時に達成できない場合、どちら
を優先するのか
それを冷静に考えてみたまえ
トラウマをわかってもらえれば、お金は
引き出せなくてもよいのか。
つまり、大会に出なくてよいのか。
何のために何をしたいのかね。
それだけのために 4 時間費やした。
トラウマを生き抜いた学生 OB と現役主
将によると、10 年間のトラウマ防止計画
という大改革は悲願のようであった。
結果的に、私は彼らの抽象性と無邪気さ
を開始直後にほとんど一撃で粉碎したよ
うだ。
学生 OB に至ってはほとんど終始泣いて
いたと言ってよい
私はここまで努力してきたのに、と泣き
喚き
新入部員には一緒に楽しもう、というだ
けでなく起こりうる辛いことを事前に全

て説明して、トラウマの被害者となるこ
とを防ぎなさいよ、と次期主将に迫って
いた。
現主将は学生 OB のトラウマ論に引っ張
られていた。
次期主将は具体的なことを具体的に計画
していく冷静さを持ち合わせていた。
私は主将と次期主将に告げた。
次相談が必要なら、2 人でできなさい。
泣きじゃくっていた学生 OB には、君は
もう来なくていいと。
私は中枢の自立を促した。
それが引き金となったようである。
翌々日のことである。
午前中に私は外来をしていた。
そこへ外線がつながった。
（学生 OB の）親と名乗る人が先生と話
したいとおっしゃってますが、と交換は
言う。
その母親と名乗る女性は、私のことをイ
ンターネットで調べて勤務先を知り、電
話してきたという。
あの日の翌日、数年おさまっていた娘の
希死念慮が再燃している、一体娘とどん
な話をしたのかと。今晚、私たち（両親）
と会ってもらえないかと。
私は危うくハラスメントの権化となりえ
た。
トラウマが汎化し常にそれに先回りして
対処しようとする現代の生のありようと、
そのようなトラウマによる失調を前提と
して社会を駆動するようになった現代文
明をプレ・トラウマティック・オーダー
と言うらしい（上尾真道「プレ・トラウ

マティック・オーダー」. In 田中雅一他編『トラウマを生きる』京都大学出版会, 2018)

若者との付き合い方を考え直さなければならぬ。

公共性と、それがもたらすリスク。

私はもう昭和の遺物になってしまったのだろうか。

(2022.6.17)

覚書 4

扉を開けると虚な眼のあなたがいる。小さな白いテーブルにはグラスに注がれた赤ワイン、ノートパソコン。酔っていたのでしょ。顔が少し赤らんでいる。

私は一つ仕事を終えたところで、身体には異物の感触がまだ残っていた。洗い流してもそれは消えない。

私を注文する人がいる。お陰様で店内ではNo.1、指名料もそこそこ。

運転手は無口で助かっている。前の運転手はおしゃべりで、何も話したくない気分でもおかまいなしに話しかけてくる人だった。彼なりに気を遣ってくれているつもりらしかったがそれが妙に恩着せがましく厚かましく、気遣いというより下衆の勘繰り。

書いても覚えてないでしょう。あなたはすぐ忘れてしまう。読んだことも読みながら。だから読んでいるそのときのあなたのために。

私はこの仕事を始めてから切るのをやめた。傷つけることをしたいのは何故だか忘れた。上書きしたいことばかりという

のは嘘。でも思い出さないために何度でも上塗りしていく。

あなたは何もしなかった。ただ椅子に座りワインを飲み、私の話を聞いていた。聞き終わるとあなたは私にお礼をいい一万円札を4、5枚渡して玄関まで送ってくれた。指一本触れられなかった。

雨が降っていて、車内に流れる水滴を追ってみていた。恋でもないし愛でもないし友情でもないし、憐れみでもない、と願う。ただそれだけのことで、たまにいる客のひとり。

あなたはいま、靴を履き違えて子供に怒られている。

もう一度、そう履き直せばいいと諭されている。私はあなたにとってなんでもなくあなたも私にとってなんでもないが、なんでもない関係が続いていることが、しあわせです。

初夏、木漏れ日のなかであなたは空を仰ぎ見て忘れたことも忘れて思い出そうとしたことも忘れて、私が隣にいることも忘れて、ただ忘れ続けて、たまに私のことを見て、唇が赤いねと初めてのこのように何度もいう。

シャワーを浴びて滑りけをとる。汚れるためにまたとる。

あなたが呼んでくれた日は、シャワーも浴びずただ座っていた。ワインを傾けながら、話を聞いてくれていた。

私は悪い男でねとあなたは言った。笑みを籠らせて。後ろのカーテンが少し開いていて、雨音が聞こえてくる。

扉を開けた途端に押し倒すとか、殴りか

かるとか、お尻を剥き出して思い切り引っ叩くとか、服を全部脱がすとか、そういうのは悪い男ではなくて、普通の男だった。

普通の悪い男だよ、とあなたは言った。飲み過ぎてゲロ塗れになってみな忘れてしまう。

綺麗だよとも、好きだよとも、愛してるよとも、嘘でもあなたは何も言わない。言わなくていい。もう何も言わなくていい。

あなたは右の靴を履いて、また脱いで履いて脱いで履いてしている。神妙な面持ちで。

諦めたのか、靴をすっかり脱いでしまい、そばの木におしっこを引っ掛けて芝生に横たわった。蟻が何度か顔の上を横切った。あなたは微動だにしない。雲の行方を眺めているようだった。晴れていて少し眩しそうにしていた。次第に日は傾き、夜になった。あなたは股間を掻きむしっていて、起きているのか寝ているのかもはやわからなくなった。夜が明けて私はまた空っぽになる。

(2022.9.6)

覚書5

早朝の車内で人々は同様に物憂げに揺れていた。

草が風で揺れるように電車の揺れに揺らされていた。

恰幅の良い中年男は、熱心にTwitterを検閲していた。

もりかけさくらをどれだけ説明してもま

だ説明を求める連中に何を言っても同じだ。

そう書き込むと、こぜわしくその他の記事のチェックを再開した。

座席では制服の小学生が、帽子をのせた頭を上下にしながら眠りこけていた。

ドアの右側の猫背の小男は、せっせとスマホゲームに耽っていた。

小男はシャツをズボンに入れ、どうも中学生か高校生のようにだった。

痩せた小男の埋没はある緊張を周囲に伝えていた。

車掌は駅が近づくと半身を乗り出し、外を確認していた。

帽子の下の目は眠たげに細められていた。列車が速度を落とすにつれ、いよいよ閉眼し、駅に着くと物憂げに開眼し仕事を再開した。

私は、シモーヌが眼球を舐め回し、眼球に見立てた卵に尿を引っ掛けようとしている場面を想像していた。

ある駅で、座席の小学生はふいに立ち上がり、ドアに向かった。

車内に入り込む乗客たちと逆流しながら、降り遅れまいとドアに近づいた。しかし、彼は降りずにドア近くで立ち止まり人々を困惑させた。

シモーヌはマルセルを想い、浮かんだ卵の上に小便をひっかけていた。

終点に近づき、ますます車内は混雑を深めた。

ドア近くの小男は傍若無人にゲームに埋没していた。

小男にとってゲームのために必要なスベ

ースを確保することが小男に唯一必要なことであった。

やがて小男の突き出す前腕は乗り入れる乗客の干渉することとなり、人々は乗車のために小男の前腕を避けなければならなかった。老人は避けることなく彼の前腕と衝突した。

老人は罵りながら突き進み、彼の前腕を跳ね返した。若い小男は虫のような鳴きながら老人の手を払い返した。

老人もまた奇声をあげながら小男をドアの外へと押し返し、小競り合いとなった。後から入った若者が器用に両腕を間に挟み込み仲裁を図った。

覚醒した車掌も様子を伺いに来たが、役には立たなかった。

小男も老人も声にならぬうめき声を発し、電車の揺れに身を任せた。

私も含めたその他の乗客は何一つ表情を変えずに、黙って見ていた。

やがて終点に到着し、小男を含めた乗客は物憂げに走り去った。

(2022.9.9)

覚書6

女がいたのだが彼女はなんという名前だったのか私はつくづく記憶の弱いからよく覚えていない。

ブラジルの豆を挽いたコーヒーを飲んで彼女は言ったのだ。あなたはだからだめなのですね。

あなたはだからだめなのですね。私は街を歩きながら一体なにがだめなのだろうと考えたのだがそれが分からないから、

夜明かしの店に入っては安酒を煽って考えるのだけどそれでもよくわからない。

みんな私のわきをすり抜けていく。誰もが何かを見ているようで見ていないのは、きっと酒か女のことを考えているのだ。

店の並びは木綿と麻の服を売りつけるのは夏が近いからだ。みんなスマートフォンを見ている。みんなスマートフォンの中の夢を見ながら、でも今の目の前もどうして夢じゃないのか誰が言えるだろう？

夢なのか夢じゃないのか、私がいま人間なのか人間じゃないのか、人間と獣は足の数が違うだけなのか、わたしはわたしなのか他人なのか、そもそもその疑問じたいが形にはならないのか、なんだかだんだんわからなくなると尻のあたりがむず痒くなり、考えたくなくても考えてしまうから私は私を麻痺させる必要を感じた。それで私はまた夜明かしに入って安酒を煽ったのだけど塩味がするだけでなんの染み込みもしなかった。

私はまだ酔わない。

「ニーチェは釈迦の真似事だよ」とにやにやしていたのは市場の爺いだ。

傷んだ魚を売りながらにやにやする爺いは先生のつもりなのか。僕がどこにも行けないと思っているのか。酒を煽る僕を愚弄することは許さない。私は獣であっても私は人間だと思っている。その私を愚弄することを許さない。許さないけどどうしようもない。

お節介はやめ給え！君は僕に説教をするつもりなのか。きみは私よりも偉いかも

知れないが、私のことをなにも知らないじゃないか。私を救うつもりもないのにめったなことは言わないでくれ。私はもう分かっているんだ。私は分かっていることを十分分かっているんだ。

おんながくるくる舞っている。随分きれいだ。全部水の中だから見えるものは曖昧で、僕も女も窒息するんじゃないかと思うが案外生きてる。女は僕のために舞っている。どうかそのまま舞っていてくれ。僕の酔いが覚めるまでせめて舞っていてくれ。どこにも行けないように見えても、僕もあなたも進んでいるのだ。だからどうか見放さないでくれ。その証拠に全部水の中でも僕たちは生きてる。生きてることだけは信じてても文句は言わぬまい。狭隘なビルの谷間にあっても、僕たちの命は確からしいと言ってください。

私はまがいのものの夢から覚めた。

夢から覚めても酒は残っているから、夢が本当なのかそうで無いのか区別はつかなかった。

(2022.9.22)

覚書 7

携帯電話に下書き保存されているテキストを読んでみると、ちっとも記憶にないことばかり書かれている。

私が書いたのか私のために誰かが書いてくれたのか、わからないが日付をみると何年も前に保存されているようで、ということは私は何年かしてようやく何やら書かれていることに気づいたことになる。

とても頭が冴えている日は、私は私が忘れていたことを忘れていたことに気づいている。忘れていた日はもうただ忘れていたのだろう。

私は下書き保存されているテキストを一つずつノートに書き写していった。書かれたものの手つきはさまざまで、私が書いたようにもみえるがそうでないようにもみえるし見当がつかない、ただそれを写してみると私は確かに書いたに違いない!と思えたり、やはり気のせいかもしれないと思えたり、それをさっきもやったかもしれないと冴えている私は薄々気づいており、ページを戻ると同じテキストを3回ほど写したところであった。

テキストに私はと書いている私は、酒を飲むとデリヘルを呼んだ。彼は彼女を迎え入れて、ただ話を聞いていた。彼女は看護師になりたいという。目が明るくて、躊躇いが無い。私はお札を何枚か取り出して彼女に手渡す。ある人はB型肝炎だという。彼女も看護師になりたいという。虚な目をしていた。舌は少しもつれている。私は話を聞いていた。お酒を飲んでいるといつのまにか90分が経っている。ベルがなり、私はお札を何枚か取り出し彼女に手渡す。指名するかしないかで金額が変わる。ランキングもありNo1だとそれなりの料金になる。私は、という私はNo1を指名してみる。

No1は確かにスタイルが良いとか器量が良いとか、そういうことでNo1ということには納得がゆく。私はしかしお酒を飲んでおり、彼女と90分何を話したのかは

とんど、というかまったく覚えていない。話だけして帰ったことはあるのかと聞いたかもしれない。ただそういうこともあると言ったかそういうことは初めてだと答えたかは今の私にはわからない。

彼は何をしたかったのだろうか。彼女に触れないということをしたかったのだろうか。触れないという特別なことをしたかったのだろうか。彼は何を買ったのだろうか。金を捨てる行為を買ったのだろうか。

呼んだのに、眠ってしまったこともある。朝気づいたら何件も着信が入っていた。看護師を目指している彼女だった。それから会うことはもうなかった。

別の人を呼んだときは、酔ってはいたが部屋を開けることはできた。マッサージをしてあげようと酩酊状態でなければ言わないようなことを言い彼女の背中を指圧しているうちに眠気に勝てずすぐ眠ってしまったらしい。私は財布を放り出し取って行ってくださいと告げた。彼女は最初から笑顔一つ見せず、ただ金を回収し去って行った。怯えたような目をしていた。

私はそれから数ヶ月後のテキストでは、百万遍を歩いている。交差点で信号待ちをしているフランス人のような女性の尻を一生懸命眺めていた。信号が青になれば私はフランス人の尻を追いかけた。貪るように私は尻を追いかけていた。途中で彼女が銀行に入れば私は前を歩きながら、後ろの尻を追いかけていた。尾行も前からするのだから、お尻だって前から

追いかけることがあっていい。私は後ろのお尻を追いかけながら背中中のリュックが重いので喫茶店に入りたいと思っていた。

交差点を過ぎたところに一軒、喫茶店があったが入ろうとすると、店員が近づいてきて、学生か否かと問うのでわからないと言えば怪しまれるだろうから、学生ではない、と私は言った。彼は申し訳なさそうに、このカフェは学生限定なんです、すみませんとそそくさと言った。こんなにすいてるのに学生限定にしているのはどういうわけかわからなかったが、限定ではしようがない。

店をあとにして、よたよたと歩いているとまたフランス人の尻が後ろから現れた。私はそれを一生懸命、そう見えないように追いかけた。

大学のキャンパスには銀杏の実がばらばらと落ち始めていた。やがてこの道は異臭が立ち込めることになるだろう。少し肌寒くなってきた。いつも通ったような道だった。

学生の頃によく立ち寄った古書店に入ってみると、当時は気にもとめてなかっただろう本が目に入ってくる。古書店巡りの醍醐味は絶版本との出会いにあるかもしれない。テキストの私は時間に追い立てられているようで、平積みの本まで物色する時間もないまま、『精神分裂病』という今は絶版になっている書籍を1000円で購入し店を出た。

地元の精神医学教室の教授は、「統合失調症というのはよくない」と学生向けの

講義の中で言った。黒板に丸を描いて、それに斜線を引いてみせた。このように風船が裂けるように精神が分裂してしまうのが分裂病なのだという。プロイラーの言った分裂病は精神の分裂ではなく、連合弛緩のように連想が分裂するという事で分裂というのは単に統辞法の問題を指摘しているに過ぎないと聞いたことがあったが、そのようなことを指摘する学生もなく彼は「分裂病は治らないですね」と続けた。私は治癒した例を一例しか経験したことがない、と臆面もなくのたまっていた。

かれこれ18年くらい前に住んでいたキャンパス前のアパートは今でも外観はほぼ当時のままのように見えた。暗証番号の入力が必要な玄関の前にぼうっと立ち尽くしていると中から人が出てきた。不審者と思われぬように私は慌ててアパートを離れたが、アパートから出てきた男性も私と同じほうへ歩いてくる。車道を横断し、私は何食わぬ顔で男性の前を歩いていた。私が行きたい方角とは反対になってしまったが今更方向転換して不審に思われてもいけないと思いそのまま私は歩き続けた。やがて男性は私を追い越してコンビニへ入って行った。なにやらATMの操作をしているようだった。ぷりぷりとしたお尻の男性だった。だからどうというわけではないが。私は一生懸命お尻を見ていたに違いない。男性がコンビニに入って機械に気を取られているうちに私はそっと踵を返した。街路に彼岸花が咲き始めた。コオロギや

スズムシも鳴き始めている。大学には当たり前のように常に学生がいて、同じような風景が20年近く変わらず続いていたのだろうか。石垣のカフェはとうの昔に撤去されたようだったが。

秘密基地への憧れは常にある。秘密のマジト、アジュールである。木や石でできた頼りない階段を昇り、暖簾をかき分けて入る暗く小さな部屋といえるかどうかわからないが小さなひと区画に、いつもいるような人がいて、ただ10年経とうが20年経とうが昨日のこのように迎え入れてくれる、そういう人たちや場所はどこにあるだろうか。

私の一日と持たない記憶が鮮明なうちに、鮮明と思っているうちにも薄れているだろう不確かなものをそのまま残して、書き留めているうちに、記憶を持たない喫茶店のマスターのことを不意に想った。彼には記憶がないが、彼自身がその店の記憶であり年輪だった。場所の記憶は大地への信頼だろう。私の記憶などどうでもよい。

(2022.9.25)

備忘録 1

いま考えごとをしてたでしょ

と女は言った。

あなたは何かしら手でいじってないと気が済まないのね

とも言った。

おそらくは軽い意識障害なのだろう。

時間と場所が分からなくなることはない。

我を忘れる程度でしかない。

忘れたことも忘れていないに違いない。
こうして書き留めていることも、いつからの習慣だったか思い出せない。
忘れたことを忘れないように、それを覚えていた内に書き留めた最初のものなのか、8番目のものなのか、それも忘れてしまっている。
こうなると困ったことに、外界からの影響を受けやすくなる。
他者の感情が勝手に入ってくる。
他者の感情が分かるということでもあるのだが。
とりたてて騒ぐことでもない。
人間であれば誰にでも起こることだろう。程度問題にすぎない。
テクニカルなことを言えば、自我境界をゆるめるということである。
右派はそれが苦手で、空間に遊びがなく緊張が強い。
左寄りな私は、その辺りがかなりルースになっている。
私という連続を疑うことはもちろんないが、時に不連続を自由に楽しむ遊びがある。
時に度を過ぎると、ろくでもないことをしでかすこともある。
射精を知らぬ幼少期の私は、時に女に尿を引っ掛けて恍惚としていた。
あるいはビルの上からジッポライターに灯した火を落としてドギマギとしていた。
人と話す時、
私の関心は、いつの間にやら、相手の主体の構成へと向かうようだった
相手の、その主体へ、その一なる切痕へ、

一なる穴に吸い寄せられるように我が溶けていく
その時私は、私という連続性を保守しつつも時に不連続にジャンプし渾然としていく
私はそのように幾多の女と、それに劣らずたくさんの男と交わった。
あなたはただ女と寝たいんでしょ。
私は、一人の男に愛されたいの。
そう言った女は最初の女だったかもしれないし、8番目の女かもしれない。
そうやってあなたは誰とでも意気投合するのね
とも言った。
あるいは別の女だったかもしれない。
(2022.10.13)

覚書 8

彼女は絵を描いているといい、Twitterのアカウントを教えてくれた。漫画だった。どんな絵だったかはすでに覚えていない。酒を飲み、無料の音楽をパソコンで流していただろう。笑顔は少なく、視線の交わりも少ない。体に触れるでもセックスをするでもなく、ただ時間を潰していた。フィールドワークといえば聞こえは良いが、そうではないだろう。私にはそうするしかなかった衝動があった。
学生時代にわからなかったのは、学生の従順さであった。学生同士はコミュニケーションをとり、答えを導き出すには教科書より何よりも人との交流が必要である、ということは勉強はしなくても仲間内で同じことをしている人が得をするし

人と違うことをしていればどんなに頑張ろうが評価されない、ということに不満も不平も違和もなく当然のこととして互いに排他性を強めていく。

こんなことを書いている私はずぼんもパンツも履いておらず、シャツも着ておらず、気づけば涎のような液体が顎や胸元にひろがり少し鼻を突くようなにおいがするのだが、不思議と嫌な心地はしない。田中さんか山田さんか、忘れたが待っていれば彼女が私のお尻を拭いておむつをはかしてくれるに違いない。もうどのくらい待っているかしのれない。待っていることさえ忘れていたのだから待っているということにすらならないし、待たれているのかもしれないし、少なくとも待たされて怒るのはこの際見当違いだろうと思った、というのは待っているのか、待っているとすればどのくらいなのか、あるいは待たせているのか、待たせているとすれば私は彼女を待たせないために何をすればよいのか全くもって見当がつかないのだから。

金木犀も落ちかけている。空気が張り詰めてきた。鼻の奥が痛いくらいだ。寒い。裸であるからなおさら、寒い。私は待っているのか待たせているのか、どちらでもよいが清々しい気持ちで裸のまままで寒いままだった。

馴れ合いも好まず、いがみ合うのも性に合わず陰謀めいたことにも馴染めず徒党を組むわけでもなく孤立無援で奮闘するわけでもなく変わり映えのしない哲学思

想宗教に嫌気がさしかとって誇大的に自説を披瀝する若さと驕りからも遠ざかり、かといって生理的な欲求がないわけではないからしまりが悪いとなればおむつをしないわけにはいかない、と独り言を呟きながら鴨川の河川敷に寝そべり芝生についた露の冷たさを感じワインをラップ飲みしている。

携帯電話の下書き保存された文書をひとつ読んでみる。数年ほど前に書かれたものらしい。送信はされなかったのだろうか。

つらかったですね

辛口でとのことですがやはりあなたは悪くないと思いますよ

ハーマンの心的外傷と回復という本があります

心に傷を受けた人が加害者に愛着を持っていることはよくあることで、傷つけたという事実はあなたが先生のことを好きかどうかとは関係ないと思います

あなたが好きだったのなら先生はなおさら罪深いことをしたなと思います

実際に訴えたら強制わいせつ罪や傷害罪に問われると思います

あなたが罪の意識をもってしまうことも、よくあることなのですが、何も悪くないですよ

憧れている人に会いたいと思うのは自然な感情です

被災者でも生存者罪責感というのがあります。自分だけ生き延びてしまっただけで申し訳ないと感じてしまうという

レイプされた方もそんな夜道を一人で歩いてたほうが悪いと人から言われ自分でもそう思うてしまうことがあります
そうして最初の傷を軽くしたい、どうせ自分が悪かったのだからという気持ちもあって、新しい傷を自分から受けに行くような行為を重ねることがあります
たとえば男性からセクハラを受けるような状況に自分から飛び込んだり、DVする男性と付き合ったり風俗で働いたり
私が心配してるのはそういうことです
必ず弱った心に付け入ってくる人がいて、そういうことにまた巻き込まれてしまうことがあります
あなたはまだ若いですし人生も長いですから、変な悪循環には巻き込まれずに希望をもってほしいです
傷は皆言わずとも一つや二つ持っていることがあります
一つの区切りとして先生とは連絡をとらない、訴えるなど、どうするかは答えはないと思いますがあなたが次に進むためにどうしたらよいかを第一に考えて決めたらよいと思います
これは個人的な意見ですが 傷を愛せるようになれるといいと思います
傷ついた気持ちはどうしても残ります。消そうと思っても消えないから別の傷を重ねて深みに落ちてしまうことがあります
あなたはこれからがありますから最初の傷だけで十分です。先生が好きだったように、その傷だけを大切にしてください。

普通に考えたらいくら好きと言われても嫌がる未成年に繰り返し性的な行為をするのは犯罪ですしその子の気持ちを考えた行為とは言えないのですべきことではないです
あなたは何も悪くないですよ

これを書いた人間が誰だか今の私にはわからない。
私は本棚から『傷を愛せるか』という本を探して読み直してみた。

傷のある風景から逃れることはできるかもしれない。傷のある風景を抹消することはできるかもしれない。けれども傷を負った自分、傷を負わせた自分からは、逃げることはできない。記憶の痕跡から身体が解放されることはない。(p224)

傷のある風景が残りつづけることによって、人はときに癒される。終わらない、長い「戦後」がそこに記されている。くりかえそう。

傷がそこにあることを認め、受け入れ、傷のまわりをそつとなぞること。身体全体をいたわること。ひきつれや瘢痕を抱え、包むこと。さらなる傷を負わないよう、手当てをし、好奇の目からは隠し、それでも恥じないこと。傷とともにその後を生きつづけること。

傷を愛せないわたしを、あなたを、愛してみたい。

傷を愛せないあなたを、わたしを、愛し

てみたい。(p226)

(宮地尚子『傷を愛せるか』)

傷つきに気づく。ということが実はなかなかお互いにできない。

傷自体を覆いたくなる。

何も今私が裸でいることの言い訳をするためにこんな話を始めたわけではないだろうが、私は何を言っているのかさっぱりわからない。やはり裸でいることの言い訳をしたかったのかもしれない。私は果たして待たれているのだろうか。だとすれば申し訳ない。

(2022.10.24)

覚書9

そんなあなたが、すとれいと、というチームにいるっていうのは変な話ね、と女は言った。

そもそもヘテロをストレートということ自体がおかしいでしょ、私はこれでストレートよ、と男は言った。

なんで同性愛者だけ同性愛者と名乗らないといけないのよ、あんたは自分が異性愛者ですって言うの、と続けた。

言わないわね。なるほど、あなたはすとれいとなわけだ。

そういうことよ。どこかにいい男いないかしら。

どんな男がタイプなの。

やっぱり身体の相性よね。

まず寝てから始まるってところあるよね。

そうそう。そういうことなのよ。

でも、終わった後に、そのままそばにい

て、いつのまにか眠ってる、みたいなこともあるよね。

そう？私は終わった後は一緒には寝たくないわ。私寝相悪いもの。

(2022.11.2)

覚書10

何十年も前に言うべきことを言えずに離れた人とすれ違いざまに、もっと前に暖炉のある家でワインを傾けて、頬を照らし何も言わず、むしろ毒づいていっそ嫌われようとしたその人と施設で再開したときには互いに顔もわからず、記憶も曖昧で言葉も出ないが静かに微笑みを交わし合い、「どこかでお会いしましたっけ」と昨日のことも忘れて、それでも他生の縁と思うのは巡りめぐってただ正しいこと以上に実に正しいことのように思われた。

彼は若い頃に男に接吻された話をした。「そういうことも何度かあった」テーブルの吸い飲みを加えて少し咽せ込んだ。車椅子を挟んだ正面に窓があり、眩しそうに揺れる木の枝のあたりを見つめている。

私は彼がするテレビゲームの画面を見ていた。彼はゲームの最中、ローディングの時間だったか、おもむろに振り返り唇をあててきた。産毛のような髭の感触が口元に残る。彼はじっと私をみて、何事もなかったかのようにゲームを続けた。彼はまた吸い飲みに手をかけたが、今度は飲まずに少し吸い飲みのお茶を揺らしただけだった。

彼が何度唇を押しつけてきたのかもはや覚えていない。中学の頃の話だ。彼はもっと親密になろうとした。私がそれを拒んだのはある種の羞恥からで、けして彼のことを拒んだわけではなかったが、それから彼は私の家に来なくなった。高校に上がった頃には綺麗な彼女とうまくやっているらしいというのを風の便りで聞いた気がするが、夢かもわからない。私もそれからだいぶ先の話にはなるが、女性と付き合うようになった。男性との関係は一切なかった。世にこんなにも男がいるのに勿体ないと言う人の気持ちはわからないことはない。ただあえて出会おうとする気がなければ、機会は極端に少なく女性のほうに結局流れるのだろう。彼は別室の彼女のところを足繁く訪ねた。尿道に繋がった管に気づかずに、尿の入ったバッグを置いたまま走り出すものだから看護者にとっては厄介な行動であったかもしれないが、彼は手を縛られようと、体を縛られてようと、手袋をつけられようと、囚人服のような服を着せられようと、何をされようが拘束具をひきちぎってでも彼女のもとへ向かおうとした。彼は「妻だ」という。彼女のもとへ無事辿り着くと、奇妙なことだが自然と懐かしい気持ちが溢れてくるのか、穏やかな表情になり布団を掛け直し、今日もいい天気だねと窓の外を眺める。彼女は視線が合わないまま遠い方を見つめている。(2022.11.15)

備忘録 2

海の波は消すことができるであろうか？
毒は神の刻印を腐食するであろうか？
剣は思想を殺すことができるであろうか？

Johannes Ewald 「自殺のいましめ」
1779
(2022.11.29)

覚書 11

彼は言葉を発しなかった。ジャングルのような髪の毛の茂みに蟻が絡め取られていた。同級生の悪戯に少年は静かに涙を流した。悪ふざけが過ぎたと彼らが手をひいたか火に油を注ぐ形となったかは定かでないが、私はその頬をつたう涙のあとだけは覚えている。

彼は何も言わず私が戯言をいうとむくむくと微笑んだ。ほくそ笑んだというほうがふさわしいかもしれない。学校で彼はよく白帳に絵を描いていた。入選したこともあったと思う。

彼がもっと大きくなったときに再会した日のことを想像して、書き物の一部にしたことがあった。若い頃の話。私は彼とドラえもんの学校の裏山のようなところで夕暮れ時を過ごしていた。彼はよく喋るようになっており、ドラムを空で叩いていた。秋の微風を感じ夕日に面していた。鴉の声が聞こえる。木々の葉のそよぎ、小川のせせらぎが聞こえる。

uma はいつもそうやって人に話を合わせたり合わせなかったりして、時々上機嫌にしている、と言いながら彼女が睨みをきかせていることにふと気づいた。地べ

たに横たわり天井が見える横に彼女の顔があり、名前は忘れたが仮に山田さんとすると山田さんは、「聞き覚えのあるような文字と声と顔つきあわせていつも風とか音とかいい感傷にひたる悪いくせだ」と言ったと思う。uma はいつもそうだとやわんばかりだった。uma とは umanoid のことで本当は uma ではないだろう。ただそれを彼女は、名前は忘れたが uma とやったのだろう。(私の記憶は不鮮明で彼女が uma とやったのではなかったかもしれない。私が uma と思ったのかもしれない、彼女のことを) uma はといい彼女は私の手をひいた。uma はこうするのだとやわんばかりに。

ある時は彼女はただひたすら喋り私が食べ終わるのを待っていた。それが彼女の義務なのかもしれない、終始つまらなそうに頬杖をついて眺めており、私がものをこぼすと uma! uma! と言った。言ったように思った。乱暴なてつきで彼女は私のこぼしたものと口周りを拭き取り、「仕事仕事また仕事、遊んではいけない、少なくとも勝つまでは、ろくなことを言わない、そう思うでしょう」と言い私は同意を示すために頷いてみせた。彼女は私の同意には満足しなかったようだが。言葉を失ったのは私も一緒だった。彼は普通の言葉で考えていたかもしれないし、彼女は普通の言葉で語っていたかもしれないし、私は或いは普通の言葉で考え発声していたかもしれないが、読んでいる人間や聞いている人間は私たちの物した

ことどもを表層で変換して伝えようとするために、表記されるものがどうなっているか私たちの預かり知るところではなくなっているというわけだった。それも何かを隠そうとしたり、時空を跨ごうとしたり、二重三重に捻れ振れ元通りにはならずこの現実へ帰ってくるその手前とその後の重なりを重なるものとして或いは重ならないものとして或いは同時に眺めようとして視線が定まらないから、私は彼女に限らず uma とも umanoid とも言いがたく、私がそれなのか彼女かそれだったのかわからない次元でぼんやり佇んでいることになったのだろう。

コンピュータの言語変換に抵抗する、それも抵抗とわからぬよう強かに抵抗する、コンピュータに限らずしたためた物をただ届く人に届くよう、届かなくて良い人のもとを風のように通過するように、書くということがあるだろう、語るということがあるだろう。

それも uma だか umanoid だかわからないが、それを書き留めるもの、書き留めさせるものが語り手と一致しない場合は特にそうだと言えるかもしれない。

彼のことを私はかずくんと呼んでいた。仲が良くても人の家に遊びに行くということがなかったから、彼のことは学校の休み時間に話す程度の関係だったが親友だったと思っている。ジャイアンのように心友という人もいるだろう。時空を超えて声もなくいつでもフラッシュバックする友のことだ。

(2022.12.1)

覚書 12

水を三つ、入れて、水滴をなぞり、陽光を左の手でさえぎり、砂浜を眩しく眺めて、海面を乱舞する光の粒の脇で羽を休めている白い鳥の、波に揺られるままの浮沈を、全く意に介さない2、3の海水パンツの子供たちが駆け抜けてゆく それもいつのことか

私がこうして寝そべっているのは 度し難い厳密さで指を折り だから？と首を傾げる君の氷の眼差しを そのまま君に送り返す

叙情的な音楽を好む私はひどく蔑まれそれでも、人間くさいものに拘り続け涙のひとつでも流せばよいだろう という君に 君が求めているものがたいしたものではないことを諭すような野暮はせまいと、苦笑いひとつで済ませ 雨が降りそうだ と真昼の晴天の遠くの空をみて嘯いてみせる、というのも人間臭い笑みを引き出したくて

よしおがみた彼女はもう少し角がとれ、洗練されたというよりトカイの荒波にもまれ擦り切れていたのだろう、よく言うように。信じまい。

あのときの光がみていた彼女の背がほんとうなのだ。

根源的不信が叙情的な音楽をかろうじてこの世に繋ぎ止める最後の藁なのだから、真実とか現実とか、気安い言葉に気やすく付き合えるように

よしおは彼女に手を引っ張られ、いつものように、足はもつれ、少し肌寒くなっ

てきたねと銀杏並木の落ち葉と高くなった空を同時にぼんやり眺めながら呟くでもなく、声にもならず、ただうめきのように重低音が喉元で鳴る、彼女はそれに答えることもなく、ただいつものように振り返ることなく、前のめりの彼を黙々と引っ張っている

目が合わない というのは視線を向けているということではない、ということ私には彼女にどう伝えたらよいか

彼女の隣についてきた男は視線を向けずに目を合わす人でそれですべてが救われたような気がした。

男は高い空を見ていただけだった。しかし彼は空を見ていたわけではなかった。同じほうを向いている ということは見られていることといっしょだった。

見ないことで見ることがある。空はいつも私の理解を超えている。

すると、彼女の手の湿り気を覚えた。彼女もまたそうして私を見ていたのだろうか。よしおは重低音を響かせながら恥じ入るように謝罪した。驕りは罪である。

彼女の汗を愛おしく思った。飛びついて抱きついて締め付けたくなくなった。彼女の手を少し力を加えて引き寄せると、倍の力で引き返された。彼女のこめかみに一筋の汗が滲んでいた。彼女の目は汗だったとそれで気づいた。もうよくなりましたと、次ははっきりと言える気がした。彼女に感謝しなければならない。すると彼女は、暑いですねえと。依然彼女の言葉は1mmも触れなかったが、抱きつきたい気持ちと感謝の気持ちは変わらなかった

た。うう、うう喉元を鳴らしせて未来へ届けよと思った。
(2022.12.30)

備忘録3

昔ひとりの男がいた。
彼は子供のとき、きびしいキリスト教教育を受けた。
彼は普通、子供たちの聞く話、キリストの嬰兒のときのこと、天使たちのことなどについて、あまり聞かなかった。
そのかわり、それだけ十字架にかけられた人の姿が彼の眼前に示されることが多かったので、この姿が、彼の救世主についても持っている唯一の姿となり、唯一の印象となった。
まだ子供なのに、彼はもう老人のように老いていた。
十字架にかけられた人の姿は、その後、彼の全生涯を通じて、彼につきそいつづけた。
彼はけっして若くなることがなく、その姿からけっして解放されることがなかった。
(2023.2.10)

覚書 14

今日はどうもありがとう。
現実的なことと非現実的なことと。
帰宅して Brahms Symphony を聞きながら、より一層非現実的な彼岸に浸っています。君とのお話を思い出すと、それが現実が起こったことなのか、夢のできごとなのか、井戸のできごとなのか判然とし

なくなります。
いずれにせよ君と変わらずに非現実的なことをお話しできてよかった。
たとえばウクライナ侵攻のような現実的なことではなく（あれはあれで漫画のような非現実的な現象ですが）。
非現実的な、井戸のようなお話。めくるめくお話。
君が現実に現実的な素敵な伴侶を得つつある。大変に素晴らしい。
皮肉ではなく本当に、現実に。
良き夫婦の秘訣はなんでも語り合うことです。
君が一方でそれを目指しつつ、僕も他方でそれを目指しているのがとても面白かった。
そもそも語りえぬものを語り合うとはいかなることか、矛盾の出発点はそこにあるようです。
その矛盾を見つつ見ないのは非現実的な僕の現実的な落とし所だと慰めています。
そのような現実的なことと非現実的なことの落差を、最近では悲しくも美しいことのように思っています。
おやすみなさい。
(2023.2.12)

言葉を随時募集しております。どのような言葉でも構いません。応募は下記のメールアドレスまでお願いいたします。
rinshoubungeiigakukai@gmail.com